

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	とうきょうがくけいせしゆがくふぞくこくさいちゆうとうきょういっくがっこう						②所在都道府県	東京都
27～31	①学校名	東京学芸大学附属国際中等教育学校							
③対象学科名	④対象とする生徒数							⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	中等教育学校後期課程（高等学校）を中心とし、一部については前期課程を含む全校生徒を対象とする	
普通科	109	116	122	126	130	124	727		
⑥研究開発構想名	多文化共生社会の実現を支える組織力・対話力・実行力の育成								
⑦研究開発の概要	<p>「リスク」「葛藤と軋轢」「教育」を大テーマとした課題研究を通して、多文化共生社会の実現を牽引し、現代社会および未来につながる課題解決に主体的に取り組むために必要なコンピテンシー、特に「組織力」「対話力」「実行力」を養い、それを活かしたアクションを起こせる生徒を育成する。</p> <p>①課題研究および各教科の授業、国際教養群の授業における探究的学習を通して、コンピテンシーの育成と伸長を促すための体系を整備し実践する。学習領域「国際教養」において、生徒の課題研究を現実的な課題に適う高次のレベルに引き上げるための構造的な改変を行う（SGHActによる学校外活動の単位認定・総合的学習の時間の体系化・課題研究を実践につなげる支援企業参加のコンペティションの実施等）。②課題研究の質の向上および課題研究と評価方法策定のための外部連携を強化し、生徒課題研究を中核としてネットワーク化する。③生徒のコンピテンシーを評価するための指標・規準の確立を含む評価方法について、連携大学・企業・国際的組織と共同した研究・開発体制をとる。</p>								
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>現実の社会問題に即した焦点からアプローチする課題研究への取組によって、多様化複雑化を極める現代社会の課題に対し、その核心をつかんで組織的に対応できる能力を育成する。また、その研究のプロセス・成果を内部・外部の両者によって評価するシステムを構築し、グローバル・コンピテンシーを定義できる指標の提示を目指す。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>*現状の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独自の学習領域「国際教養」が開校当時から設定されており、課題発見-設定-研究というプロセスを学びながら探究的な学習を進めるスタイルを継続的に行っている。 ・プレゼンテーションやディスカッションといった発信・表現のスキルを使いながら教科学習を進める授業も多く、授業の多くにアクティブラーニングのスタイルが取り入れられている。 ・研究成果を外部に発信し、外部の活動に活かしている生徒もおり、外部からの評価も高い。一方また、社会課題や社会貢献への意識が高い生徒も多く、ボランティアツアーや途上国へのスタディツアーには生徒が自主的に参加している。 <p>*研究開発の仮説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題研究のテーマを概念化して提示することで、生徒の持つ多様な課題意識を焦点化し、現実的課題に結びつけ、机上の空論に終わらないアクションへと結びつける道筋ができる。 ・課題研究を通して、他者（学校内外の高校生・大学生・研究者・企業）と連携することで、課題解決に向かうための知識・能力・技術の組織化を図る方法、対話を通して解決の道筋を発見する方法を学び、多様な課題に柔軟に対応できる連合体を構成する能力を養える。また、第6学年次の研究をPre-SGUと位置づけることで、大学での研究への連続・接続が可能である。 ・課題研究の過程および成果を世に問い、評価を受けることで、研究の質の向上・現実性の保持が期待される。またグローバル・コンピテンシーを評価するための指標の設定、方法の確立に寄与できる。 <p>(3) 成果の普及</p>							

	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページによる成果の公表と、課題研究に関連するその他の外国語による表示 ・本校公開研究会での教員側・生徒側両者による公表 ・管理機関及び連携大学・企業との共同による成果発表会 ・生徒運営による国内外の参加者を招いてのシンポジウム・ワークショップの開催
<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 地球規模の課題解決に付随するテーマとして「リスク」「葛藤と軋轢」「教育」を主軸とし、それぞれに関わる具体的課題を生徒自身が設定・研究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「リスク」を主軸とした研究は、「リスク社会」に組織で立ち向かえる能力を中心的に育成する。多様なリスクを分析し、それに対応するための複合的「知」のチームをどのように構成するか、またそのチームでどのようにリスクに対応するかを生徒自身が考える課題研究を想定している。「葛藤と軋轢」を主軸とした研究のキーワードは「フォビア(嫌悪)」である。「フォビア」はなぜ生まれるのか、それを超えて他者と対話し、共通の課題に向かうにはどうしたらよいのかということについて課題研究を通して分析・洞察し、合意形成と平和の実現を可能にする対話力に主眼をおいて育成する。 「教育」を主軸とした研究は、生徒自身が教育を受けている立場で同世代・次世代の教育に関する課題を考える。身近なところにアプローチの入口があるため、スモールステップではあっても、研究の成果を実行すなわちアクションにつなげることを想定する。 <p>(2) 実施方法・検証評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後期課程3年間を通じて総合的学習の時間(本校では「国際4~6」)を中心として課題研究を行う。4年次:「Personal Project」・5年次:「国際5-SGH 課題研究」・6年次:「国際6-SGH 課題研究」生徒は(SSH・SGH いずれかを選択した上で)個人あるいはチームでの課題研究テーマを三つの主軸のいずれかに関連するものとして設定する。いずれの研究においても最終成果は内部発表にとどまらず、外部評価を受けることを目標とする。研究成果の内、学校外活動については、学校外活動の単位認定制度を導入する(SGHActの単位認定)。認定に際しては外部機関と連携する。 ・課題研究のための調査・研究の機会としての国内外のフィールドワーク・研修を実施する。 ・課題研究支援および課題研究成果発信の場として、また、外部講師を招いての研究支援の場として生徒をファシリテーターとしたグローバルカフェを開催する。 ・学校設定教科「国際」の6年次開設科目「国際A」「国際B」における講座「国際協力と社会貢献」「ファシリテーション実践」を開設し、課題研究を通して身に付けたスキルを発展させる。 ・大学との連携事業(東京外国語大学との連携)国際交流基金との連携、企業(CISCO SYSTEMS等)との連携を通して、課題研究の成果としての実践を行う。 ・検証・評価については、研究の質・成果の達成度・実践化の度合い、またそれらを通して見えるコンピテンシーの獲得・育成状況を観点化し、指標を設けて評価を行う。評価規準・方法は、校内外部機関もその検討・策定に携わることとする。さらに課題研究助成獲得および外部評価の場として、選抜コンペティション<ISS チャレンジ>を実施する。 <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 特になし。</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「国際教養」を始めとした各授業での「ポスト・アクティブラーニング」の取組 ・英語および英語以外の外国語によるコミュニケーション能力の向上に関する取組 <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 特になし。</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外ワークキャンプ実施(現地校でのプレゼンテーション・ディスカッション含む) ・大学・高校との交流事業の推進 ・後期課程生徒主体の運営組織SGH Student Teamの結成
<p>⑨ 其 他 特 記 事 項</p>	<p>本校は平成26年度よりSSH事業の指定を受けている。本校の国際教養は「理数探究」「人間理解」「国際理解」の三領域を中核としており、SSH課題研究は「理数探究」を主軸として運営・実施される。一方SGHは三つの領域を包括的にとらえ、課題研究は三つの概念によって再構成される。</p>